

## 銅賞

### F t Mについて

横須賀市立久里浜中学校三年

熊木 あずさ

私は今回、性同一性障害、特にF t Mの方たちについて書きたいと思います。性同一性障害とは、生物学的性別と性の自己意識が一致せず、自分に対して違和感をもってしまうこと。そしてF t MとはF e m a l e t o M a l eの略称で、生物学的性別は女性であるのに対し、性の自己意識が男性であることをいいます。

なぜ私が今回の人権作文でこのテーマを選んだのかというと、私がいかに居合わせた状況で疑問を覚えた経験があるからです。というのも、私には応援している三人組のユニットがいます。彼らは三人ともF t Mです。ですが、それをかくすことなく活動しています。彼らは単なる男装ユニットではなく、性同一性障害、特にF t Mへの社会的な関心と理解、及び同じ悩みをもつ当事者の方々にシンボライズされるようなグループ活動を目指しています。私が彼らの存在を知ったのは本当に偶然で、それまでは性同一性障害・F t Mという言葉は「聞いたことがある」というような認識しかありませんでした。それから興味をもって何回か彼らのライブへ行ったり、彼

らと直接話したりするうちに、F t Mとか関係なしに彼らが “自身” が大好きになっていきました。そんなある日、もう私の中であたり前となっていた彼らのライブへ行った時のことです。その日の会場はショッピングモールの広場のような場所でした。当然、彼らのライブだけを見に来た人だけではないですから、普通の家族づれなども中にはいました。ライブもおわりにさしかかったとき、通りすがった小さい女の子に「この人たち有名なの？」と声をかけられました。その子がすごく笑顔で聞いてきたので、私は理由もなくなんだか嬉しくなり、「うーん、有名ではないかもしれないけど。こういう人達だよ、私大好きなの」と言って彼らのフライヤーを一枚女の子にあげました。そのフライヤーには彼らがF t Mであること、彼らユニットの活動目標などが書いてありました。女の子はありがとうと言って笑ってくれたので、いいえと私も笑って返しました。その時、その子のお母さんが走ってきて、女の子が手に持っているフライヤーとその内容を見たたん、「この子にそんな余計なこと教えないで」と強めに言われました。お母さんは女の子に「こんな普通じゃない人たちのことなんか、知らなくていいのよ」と女の子に言い、女の子の手を引っ張って行ってしまいました。私はしばらく

その場を動けませんでした。思いだすと心の中がモヤモヤしました。どうして、という気持ちでいっぱいでした。なんだか泣きたくなりました。まあ、あのお母さんは、彼らのこと何も知らないのに。勝手にカテゴライズして一つにまとめてその存在を拒否するなんて。人の考え方はそれぞれだから自分の意見とちがう意見をもつ人がいるのも分かっていきます。でも、自分の中のイメージや考えを正しいと思いきみ信じて疑わず、それを他の人におしつけるのは私はまちがっていると思います。そんな考えしか、行動しかできない人は、かわいそうだとも思いました。だって、自分から視野を小さくしているのと同じだから。あのお母さんが言った、「普通じゃない」という言葉も、人それぞれ感じる普通はちがうと思います。そもそも、普通の人なんていないんじゃないかと私は思います。今はテレビなどでも、いわゆる「オカマ・オナベ」という人たちが出る機会が増えているように感じます。でも私は性同一性障害の方、F t Mの方をひとくくりにカテゴライズすることは、よくないと考えています。一人一人に事情があつて、そこへたどりつくまでの経緯はちがうから。性同一性障害と聞くだけで偏見を持つ人もいるとは思いますが。でも、偏見をもつたとしても、そこでおわりにしてほしくはないです。そ

の人自身を見てみたら、きっとその偏見もなくなると思うからです。現に私は、自分自身がつらいとき、彼らユニットの存在に救われました。

人権は、生まれながらに持っている権利。どんな人にも人権はあります。そのことを忘れず、生活していきたいと思えます。